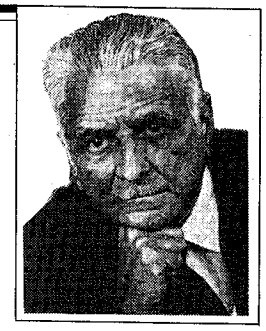
短　信

ジルベルト・フレイレ博士



浜口　伸明
（中南米総合研究プロジェクト・チーム）

去る7月18日，「現代ブラジル最高の知識人」と呼ばれたジルベルト・フレイレ博士が貧血症のため逝った。87歳だった。博士が65冊にのぼる著書のなかで追求し続けたものは，社会学・文化人類学の立場からブラジルの文化や社会の特質とその形成過程を明らかにすることであった。それらのなかには英語等に翻訳されたものも少なくない。*The Times* や *Le Monde* が博士の訃報を大きく掲載したことからみても博士が残した業績に対する国際的な評価の高さを証明している。

ジルベルト・フレイレ博士は1900年3月15日，東北地方のレシーフェに生まれた。父は厳格な教師であったが，先祖はこの地方の伝統的な大砂糖農園主で，広大な土地とたくさんの奴隷を所有していたらしい。幼年期のフレイレはいつまでたっても字の読み書きが覚えられなかったので，知恵遅れではないかと両親を心配させたという逸話が残っている。

17歳の時，渡米。テキサス州のベイラー大学で政治学と社会学を学ぶ。さらに名門コロンビア大学大学院に進学。この時フレイレの文化人類学の指導にあたったドイツ生まれの学者フランツ・ボアスとの出会いは，その後の彼の研究活動に多大な影響を与えた。

不朽の名著『農場主邸と奴隷小屋』(*Casa Grande & Senzala*) の初版は1933年，フレイレ33歳の年に出版されている。折しもブラジルでは輸入代替工業化によって経済力が高まったのを背景に，ブラジル人がヨーロッパの亜流ではない自らのブラジル文化を求め始めた近代主義（モデルニズモ）の隆盛期にあったころである。

『農場主邸と奴隷小屋』はポルトガルによる植民地支配期の前半（16〜17世紀）にレシーフェを中心とする東北地方沿岸部で栄えた砂糖きびプランテーションを舞台にして，ポルトガル人（農場主）が持ち込んだイベリア文化を基調として原住民の土着文化とアフリカから連れてこられた黒人奴隷のアフロ文化が融合した結果，ブラジルに新しい文化が誕生する過程を描いたものである。フレイレの「混血」を肯定的に評価する議論はモデルニズモの風潮のなかで熱狂的に受け入れられ，諸外国においてはナチの人種主義に対するアンチテーゼとして人種についての新しい視点を提供した。なお，この大著はすでに英語，スペイン語をはじめとして6カ国語に翻訳されて11カ国で出版されており，ブラジルの文化あるいは社会に興味を持つ者にとっては必読の書となっている。残念ながら日本語版はまだ存在していない。

文筆活動のほかに特記すべきものとして，フレイレは連邦下院議員を一期務めたことがある。その時に議会で発言して東北地方の社会・文化の研究を進める必要性を説き，ジョアキン＝ナブーコ社会問題研究所を誕生させた（同研究所については本誌，Vol. 4 No. 2所載の「研究機関紹介」参照）。

晩年は静かな日々を過ごしたということだが，筆者がレシーフェに滞在したころ（1984年）には，高齢のうえに心臓の大手術を経験したにもかかわらず，地方新聞に盛んにコラムを書いていたのを思い出す。ブラジル，特に東北地方は貴重なオピニオン・リーダーを失った。心から御冥福をお祈りする。